

『人類学雑誌』に見る柳田国男の関心

成城大学民俗学研究所「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』の分析から

Kunio Yanagita's Academic Interests as Reflected in the Journal of Anthropological Science : An Analysis of the Editions of the Journal of Anthropological Science in the Possession of the Yanagita Bunko Library, Institute of Folklore Studies, Seijo University

MATSUDA Mutshiko

松田睦彦

はじめに

小稿の目的は、成城大学民俗学研究所に所蔵される柳田国男旧蔵『人類学雑誌』で確認される柳田自身による目印を一覧とすることで、当時の人類学に対する柳田の関心を整理し、今後、柳田の仕事と初期人類学との影響関係解明の一助とすることにある。

民俗学と初期人類学、あるいは『人類学雑誌』との関係について説いた論考は意外なほど少ない。それらを概観してみると、大藤時彦のように『人類学雑誌』を民俗学史上に位置づけ、「生物としての人類」についての研究を重視しながらも「風習を研究する習慣部門というものを、人類学研究の一部分」とし、地方ごとの「土俗」を比較の視点からとらえようとした坪井正五郎らの取り組みを積極的に民俗学前史として評価しようとする論考がある一方で〔大藤一九九〇：六八―七四〕、関敬吾や和歌森太郎のように、当時の人類学が風俗や習慣に注目し、人類学の材料として積極的に収集・分析を行なったことを評価しつつも、その方法

論的未整備に批判の目を向ける論考もある〔関一九五八：八四―八九、和歌森一九七六：一一〇〕。おそらく、『人類学雑誌』に対する後者のような評価が優勢であったことが、これまで民俗学前史としての人類学についての研究が生み出されてこなかった一因であろう。

そうしたなか、曾我部一行・及川祥平・今野大輔による『人類学雑誌』考―民俗学の揺籃期―^①は、初期の『人類学雑誌』における「生活慣習」^②研究の動向を、一〇年を単位として丹念に分析し、さらに、柳田が坪井正五郎を高く評価していたことや、柳田の情報源としての『人類学雑誌』の重要性、さらには山人論への『人類学雑誌』の影響について言及した論考として評価されるべきである。また、本論考には「民俗学関係主要報告一覧」と題する表も付されており、後に成立する民俗学の関心と近接する四九九本におよぶ論考・報告を総覧することもできる。

しかし、『人類学雑誌』を民俗学の前史として位置づけ、民俗学がどのような背景のもとに成立したのか、その一端を推し量りつつ、『人類学雑誌』の関心と民俗学との連続性ないしは異質性を問う^③ことを

目的とするという曾我部らの論考では「曾我部・及川・今野二〇〇七：一一八」民俗学の前史としての『人類学雑誌』における当時の論者の「生活慣習」への視角は一定程度明らかにされてはいるものの、そうした視角が後の民俗学に対してどのような影響を与えたのか、その具体相に迫ることはなく、柳田の山人への関心や、珍奇な遺風への興味にもとづく土俗学への批判など、人類学と柳田の求める学問との相違を指摘するにとどまっている。さらに「民俗学関係主要報告一覧」についても、その選別の根拠は明確でなく、曾我部らの民俗学観にもとづいた民俗学的論題や報告の抽出に終始している側面を否定することはできない。

だが、曾我部等も指摘するように「民俗学が柳田國男が中心となって構築した学問であるという性質上、民俗学前史は柳田が学問を整備していく際に影響を受けたであろう知的営み」という立場を重視するならば〔曾我部・及川・今野二〇〇七：一一七〕、『人類学雑誌』がいかに民俗学的なテーマを扱っていたかだけではなく、柳田自身が『人類学雑誌』をどのように読み、柳田の論考や後の民俗学の構築にいかなる影響を与えたのが問われるべきであろう。

そこで小稿では、柳田旧蔵『人類学雑誌』の全号について一頁ずつ柳田による目印の有無を確認し、目印のある論考について発表年・巻号・論題・著者・目印のある頁・目印の方法を抽出して一覧とし、後の研究の素材として提出する（写真1）。さらに、柳田が『人類学雑誌』を参照しはじめた時期や柳田自身の論考とのかかわり、民俗学の形成に与えた影響などについても、この一覧の作成過程で筆者が気づいたいくつかの点について言及しておくたい。

①『人類学雑誌』の概要と「柳田文庫」所蔵『人類学雑誌』

『人類学雑誌』とは一八八六年（明治一九）に坪井正五郎らによって創刊された「人類学会」の会誌であり、現在でも日本人類学会の機関

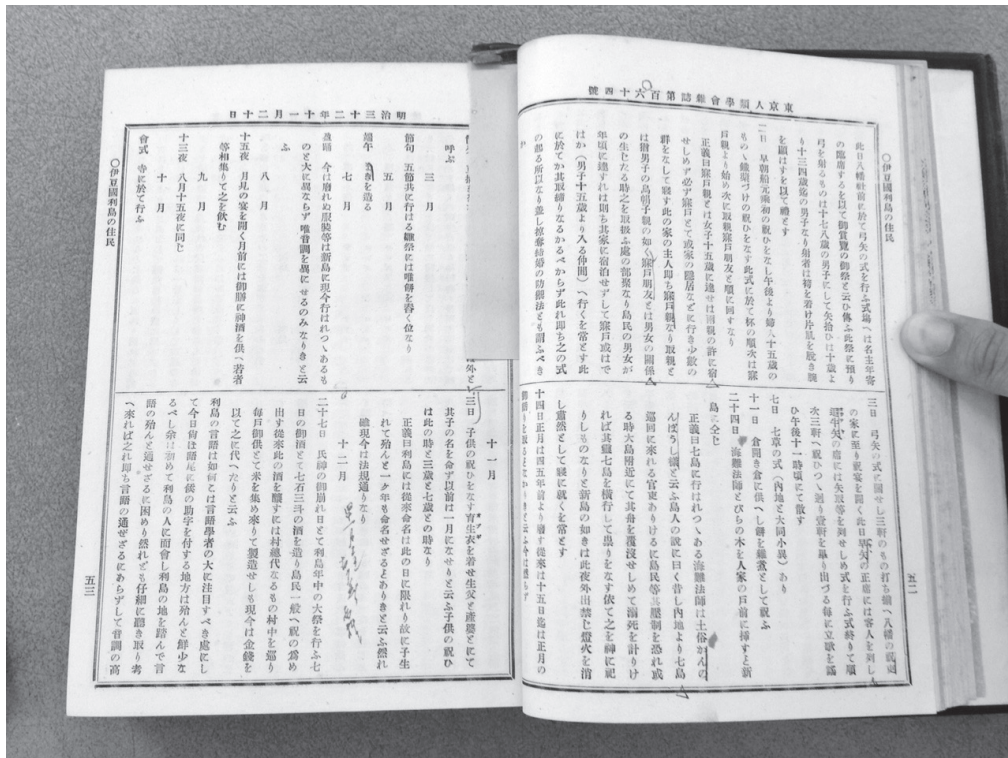


写真1 人類学雑誌第164号に残された柳田の目印
(チェック・付箋・書き込み・ライン・丸・付紙・三角が見られる)

誌 Anthropological Science として刊行が続けられている。創刊当初の会誌名は『人類学会報告』であったが、第一巻第五号からは外国雑誌との交換を視野に英文名を Bulletin of the Tokyo Anthropological Society と定め、さらに翌一八八七年（明治二〇）の第二巻の途中からは和文名の「報告」を「雑誌」に改め「東京人類学会雑誌」となる。その後、一九一一年（明治四四）四月刊行分からは、これまで一〇月を年初として年度ごとに巻数を更新し、号数については累積していた慣行（たとえば一八九四年（明治二七）四月発行の会誌は第九巻第一〇〇号）を改め、通巻第三〇一号を第二七巻第一号とし、年度替わりごとに号数も第一号から付されるようになる。それと同時に会誌名は『人類学雑誌』となった（渡辺一九九二：四五一―四七）。小稿においては、会誌名については『人類学雑誌』で統一することとするが、巻号については後の利用の便を考慮して上記の経緯をそのまま反映させている。

さて、現在の『人類学雑誌』、すなわち日本人類学会の機関誌 Anthropological Science では、「自然人類学（形質人類学）の研究者を中心に、人類の起源と進化、変異や適応、化石人類、日本人の起源、生体計測、歯の人類学、成長、霊長類、生態学」などの研究についての発表が行なわれており（日本人類学会 online: <http://anthropology.jp/about/history.html>）¹⁾二〇一四年（平成二六）二月刊行の Anthropological Science (Japanese Series) Vol.122 (二〇一四) No.2 の目次は表1のとおりである。自然人類学に内容が特化していることは一目瞭然である。これに対して、柳田国男の東京人類学会入会が報告された一九一〇年（明治四三）七月刊行の第二五巻第二九二号（柳田の入会については後述）の目次は表2のとおりである。また、参考までに、さらに時代をさかのぼって、『人類学雑誌』創刊直後の第三号の目次も掲げておこう（表3）。当時の人類学が自然人類学のみならず、現在の考古学や文化人類学、民俗学、言語学といった幅広い分野を包摂していたことがよく分かる。

表2 『東京人類学会雑誌』第25巻第292号 (1910年(明治43))目次

挿図
朝鮮発見の吸ひ壺
論説及報告
韓国発見の吸ひ壺
雑録
出雲雑記 (一)
台湾に於ける漢人の迷信 (二八八頁続き)
諸人種の小児生活 (太平洋諸島の部)
新著紹介及批評
Laufer, B.-Chinese pottery of the Han Dynasty.
遠野物語
雑報
分娩前及び分娩後に於ける發育状態
カラフト発見の鳥骨管に似たもの
最近外国雑誌の内容
ブエノス アイレス大学より寄贈
東京人類学会記事
例会
入会者
会員転居
会員死去

表1 Anthropological Science (Japanese Series) Vol.122 (2014) No.2 目次

原著論文
シロテテナガザル (<i>Hylobates lar</i>) の犬歯形態と性的二型
資料研究報告
台湾花蓮縣萬榮郷馬遠村出土ブヌン族頭蓋の形態的特徴
青森県尻労安部洞窟出土の2本の遊離歯についての理化学的個人識別
雑報
1924年の加曾利貝塚調査

表3 『人類学会報告』第3号
(1886年(明治19))目次

記事
第十八会
談話
銅劔の記(図入)
菅ヶ谷横穴より出でし土器(図入)
雑録
婚姻風俗集
備中小田郡七ツ塚ノ記(図入)
静岡清水山にて古物を得たる事(図入)
石鏃考
土佐国方言
拔萃
身長遺伝
雑記
四件(石版図入)

その背景に、東京人類学会創設の中心となった坪井正五郎の人類学に対する考え方が強く影響していることは先行研究が指摘しているとおりである。坂野徹は坪井の人類学を「人類に関する自然史／博物学(natural history)」と位置づけ、「人類／人間に関わるすべての事象を網羅しようとする意志」、「材料蒐集を重視しようとする姿勢」、「方法の統一化・一元化を避けようとする態度」といった三つの特徴を指摘している〔坂野二〇〇五：二七―二八〕。

さて、柳田国男旧蔵『人類学雑誌』が収蔵される「柳田文庫」とは、成城大学民俗学研究所に所蔵されている柳田国男の旧蔵書群である。帝國農会へ寄贈された農政関係の蔵書と、慶應義塾大学言語文化研究所に寄贈された方言関係の蔵書を除く約三七、〇〇〇冊の柳田の蔵書が収められている。その内訳は、和漢書約一五、五〇〇冊、洋書約一、五〇〇冊、逐次刊行物約一、五〇〇種となっている。

柳田の蔵書は柳田の生前と死後の二回に分けて成城大学に受け入れられた。第一期の寄贈受け入れは一九六二年(昭和三七)八月八日の柳田逝去の日であるが、柳田が成城の自宅に開設していた財団法人民俗学研

究所の一九五七年(昭和三二)四月八日の解散にもなっており、すでに成城大学に寄託されていたものであった。第二期の寄贈受け入れは一九七九年(昭和五四)である。一九七二年(昭和四七)一月一二日の柳田夫人・孝の逝去後、柳田家に残されていた旧蔵書が寄贈された。さらに「柳田文庫」には、一九七三年(昭和四八)の成城大学民俗学研究所設立以降に柳田の親族・関係者より寄贈された貴重書も含まれている〔成城大学民俗学研究所二〇〇三：三三「柳田文庫の沿革」凡例〕。

「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』の概要は表4のとおりである。基本的に巻ごとに合本されており、第一―二巻、第五巻、第三〇巻、第三八巻、第五〇―五九巻が欠けている。その他、合本されている中が一号から番号欠けていることもある。欠けている巻については、はじめから柳田が手に入れていなかったのか、柳田は手に入れていたにもかかわらず何らかの事情で「柳田文庫」に収蔵されなかったのかは不明である。また、欠けている号についても、「柳田文庫」に収蔵されていないことが、ただちに柳田が参照しなかったことを意味するわけではないであろう。

柳田国男が東京人類学会の会員となったのは一九一〇年(明治四三)のことである。『人類学雑誌』第二五巻第二九二号の「東京人類学会記事」の欄からは柴田常恵の紹介で柳田が入会していることが確認できる。つまり、柳田が刊行と同時に『人類学雑誌』を手にしたのが確実なのは同年七月からということになる⁽⁶⁾。

では、柳田は「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』のうち、第二五巻第二九一号以前をどのように手に入れたのか。その詳しい経緯は不明である。しかし、第六巻および第七巻の全号には「東京統計協会」の蔵書印が捺されている。柳田は東京統計協会の機関誌『統計集誌』第三三八号(一九〇九年(明治四二)四月)および第三三九号(同年五月)に「町の話」を寄せており、『人類学雑誌』第六号および第七号入手の背景に東京統

表4 「柳田文庫」所蔵『人類学雑誌』一覧

巻	号(始)	号(終)	欠号					
1			全欠					
2	16のみ所蔵		全欠					
3	21	30	23					
4	32	43						
5	44	54	全欠					
6	55	66						
7	67	78						
8	79	90						
9	91	102	102					
10	103	114						
11	115	126						
12	127	138						
13	139	150	139	140	141	144	146	150
14	151	162	152	155	156	158		
15	163	174						
16	175	186						
17	187	198						
18	199	210	202					
19	211	222						
20	223	234	224					
21	235	246	236	237				
22	247	258						
23	259	270						
24	271	282	273					
25	283	294						
26	295	300						
27	301	309						
28	310	320						
29	321	332						
30	333	344	全欠					
31	345	356						
32	357	368						
33	369	380						
34	381	392						
35	393	404						
36	405	416						
37	417	428						
38	429	434	全欠					
39	435	446						
40	447	458						
41	459	470						
42	471	482						
42-付	1							
43	483	494						
43-付	1	7						
44	495	506 (付1-4)						
45	507	518 (付1-11)	509					
46	519	530						
47	531	542	539					
48	543	554						
49	555	560						
49-付	1	6						
50			全欠					
51			全欠					
52			全欠					
53			全欠					
54			全欠					
55			全欠					
56			全欠					
57			全欠					
58			全欠					
59			全欠					
60・61	687	693	687					
62	694	698						
63	699	704						
64	705	708						

注：「付」は付録を示す。本巻に合本されたものと別冊のものがある。

計協会との関係があったことが推察される。

さて、第二巻第一六号からはじまる「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』は、第四九巻の付録（一九三四年（昭和九））の巻までで一度途切れ、第五〇巻（一九三五年（昭和一〇））から第五九巻（一九四四年（昭和一九））までの計一〇巻を欠き、ふたたび第六〇巻（一九四八―四九年（昭和二三―二四））から第六四巻（一九五五―五六年（昭和三〇―三一））までを数えておわる。問題は柳田がどこまで購読していたかである。会員名簿を確認すると、一九三三年（昭和八）一月の段階までは柳田の名前を確認できるが、翌一九三四年の名簿には名前がない。したがって、柳田は一九三三年一月から一九三四年一〇月の間、すなわち、第四八巻第一二号から第四九巻第一〇号の間に東京人類学会を退会していることになる。「柳田文庫」に第四九巻およびその付録が収められていることを考慮すると、第四九巻の完結を待って柳田は退会したと考えるべきであろうか。

ただし、「柳田文庫」の『人類学雑誌』は短期間ではあるが第六〇巻以降も続く。それらを確認してみると、第六〇巻第二号には「民間伝承の会」の蔵書印が、同巻第三号、第六一巻第二号、同巻第三号には「日本民俗学会」の蔵書印が捺されており、後者の住所は「東京都世田谷区成城町六三一（千歳局区内）」となっている。さらに、第六二巻第三号から第六四巻第四号には「民俗学研究所」の蔵書印が捺されている。なお、「乞交換」の印が捺されている巻もあり、非会員である民俗学研究所に対して機関誌の交換を求めたものと考えられることができる。

以上を整理すると、つぎのようになる。柳田は一九一〇年七月から一九三四年一二月ころまで「東京人類学会」の会員であった。したがって、一九一〇年六月以前の「柳田文庫」所蔵『人類学雑誌』については、柳田が刊行と同時に読んでいたという保証はなく、柳田による目印についても、内容を精査しなければその時期を特定することはできない。

② 目印の付された論考一覧

それでは、柳田が『人類学雑誌』のどのような論考に関心を示し、目印を付していたのかを、小稿末の別表を参照しながら確認したい。

この表は「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』に残された柳田自身による目印を確認し、目印の見られる論考名と目印の形態を一覧にしたものである。柳田は計五四一本の論考に目印を付けている。その論考のタイトルや著者名から、柳田が『人類学雑誌』に掲載されたどのような論考に興味を抱いていたのかを推測することができる。また、本表を手がかりとして「柳田文庫」の『人類学雑誌』を確認することで、今後柳田の論考と『人類学雑誌』掲載の論考との影響関係を調査することも可能となろう。

表には左から、発行年・巻号・論考名・著者・目印の形態・目印が確認できる最初のページを記してある。

柳田による目印にはさまざまな形態が認められるため、便宜的につきのようなアルファベットの記号で記した。

- b…バツ ×
- c…チェック ✓
- f…付箋
- k…書き込み
- l…ライン
- m…丸 ○
- t…付紙（赤や青の色紙を二〜三mmの大きさにちぎって貼り付けたもの）
- s…三角 △▽（向きは上下有り）
- y…山 へ

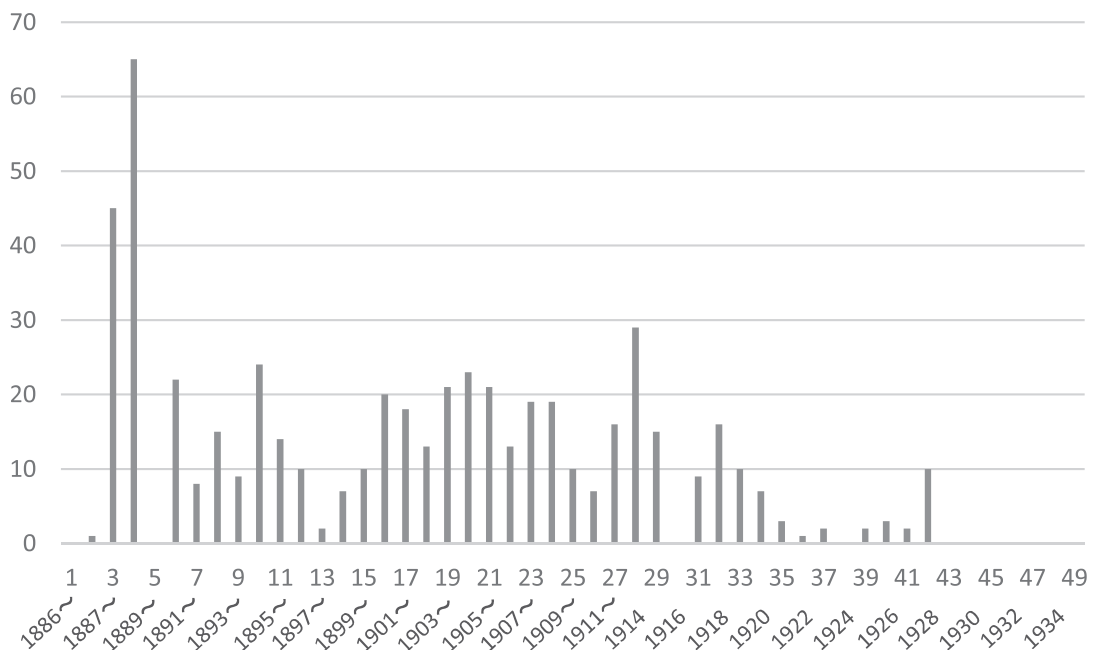
ここでは、これらのチェックの登場順や登場回数にかかわらず、その論考で確認することのできるチェックの形態をアルファベット順に記した。ただし、これらのチェック方法を柳田がどのように使い分けていたのかは定かでなく、今後の研究が待たれるところである。

また、チェックは一つの論考のなかの複数ページにわたって確認されることも多いため、チェックの見られる箇所については、その最初のページのみを記している。したがって、本表を参考に「柳田文庫」の『人類学雑誌』で柳田のチェックを確認する際には、該当する論考の本表に記されたページ以降についても見る必要がある。さらに、これらの目印がすべて柳田の手になるものか疑問を挟む余地もあり、正確な分析のためには慎重な検証が必要となる。

なお、柳田がチェックした内容については、筆者自身のメモとしては控えたが、表で取り上げるとは断念した。柳田によるチェックは、単語にチェックや付紙がなされていたり、文章に傍線がひかれていたりする場合にはその意図をくみ取りやすいが、行頭や行末に丸や三角などの印があるだけの場合には、柳田の意図を正確に読み取ることができない。また、チェックが行なわれた時期によっても、それぞれのチェックの形態が意図するところが異なる可能性もある。したがって、柳田のチェック内容についての筆者の推測を表に記すことは、不要な混乱を招くと判断した。

それでは、柳田はどの巻でどれだけの論考をチェックしているのだろうか。その数値を示したのが表5である。これは各巻ごとに柳田のチェックが確認できる論考数をグラフ化したものである。これを見ると、第三巻および第四巻収録の論考が圧倒的に多く、それに第二八巻が続いている。その他は巻によっては一〇を割り込むこともあるが、第三三巻あたりまではおよそ一〇から二〇の間で推移している。しかし、第三四巻からは大幅に減少し、第四二巻では一時的に盛り返すものの、第四三

表5 チェックした論考数の変化



巻以降は第四九巻までチェックされた論考はゼロである。

こうした数字の変化は、それぞれの巻に収録された論考のテーマと柳田の関心との一致によるところが大きいと考えられるが、『人類学雑誌』で取り上げられるテーマの傾向の変化、すなわち当時の人類学を取りまく大きな潮流の変化と柳田の関心との接続にも留意する必要があるだろう。一八八〇年代後半から一八九〇年代にかけて、つまり初期の『人類学雑誌』に見られる人類学会の関心は婚姻習俗や年中行事、贈答の風習などといった「土俗」にも向けられていた。その後、帝国主義にともなう日本の版図拡大によって、その関心がアジア各地に成立した日本の植民地やその他の国や地域へと向けられると同時に、一九一三年（大正二）の柳田国男と高木敏雄による『郷土研究』の創刊に見られるように、その視線は未開なアジア諸民族とは対照をなす存在としての日本人にも向けられるようになる（坂野徹二〇〇五：三八―四三）。しかし、昭和に入つて東京人類学会の中心が鳥居龍蔵から松村暎に移ると、『人類学雑誌』に掲載される論考は自然人類学が独占するようになる（大藤一九九〇：七〇）。『人類学雑誌』の第三巻および第四巻に柳田のチェックが多く見られ、一方で第四三巻以降全くチェックが見られなくなる理由も、こうした人類学史との関連から理解することができる。なお、第四六巻第一号については製本段階でページ同士がくっついてしまった箇所が切り離

表6 柳田が目印を残した著者とその論考数

著者	論考数
坪井正五郎	44
出口米吉	30
伊能嘉矩	18
鳥居龍蔵	17
羽柴雄輔	16
高山青嶂	13
南方熊楠	13
柴田常恵	11
田代安定	10
柳田国男	10
鳥居邦太郎	9
八木契三郎	9
鈴木券太郎	8
佐藤重紀	8
吉田巖	8
田中正太郎	6
大久保初男	6
内田すゑ子	6
長谷部言人	6
中山笑	5
若林勝邦	5
加藤三吾	5

注：5本以上の論考で目印がつけられている著者のみ表にした。ただし、「坪井」「いのう」ないしフルネームで書かれていない著者については含んでいない。

されることなくそのまま残されている。自然人類学に関する論文ばかりとなった当時の『人類学雑誌』に柳田が目を通していなかった可能性は高い。

さて、もう一点提示しておきたいのは、柳田がどのような論者の論考に対して関心を抱いていたかである。表6は柳田が目印を付けた論考数を著者別にまとめたものである。『人類学雑誌』への参加年数や論考の掲載本数の違いを考慮すべきであろうが、本表でもある程度の傾向は把握することができるであろう。柳田が最も多くの論考をチェックしているのは坪井正五郎の四四本であり、それに出口米吉が三〇本と続く。以下は表のとおりである。

③『人類学雑誌』に見る柳田国男の関心

さて、それでは具体的に柳田がどのような論考に関心を払い目印を付けていたのか、いくつかのテーマや論考を取りあげて確認してみたい。ただし、ここでの目的はあくまでも『人類学雑誌』に残された柳田の関心の痕跡を紹介することにある。したがって、取り上げる対象の選定は筆者の判断によるものであり、統計的裏づけなどに基づくものではない。本特集号のテーマに鑑みてはじめに断っておきたいのは、管見のかぎり、『人類学雑誌』に残された柳田の目印からは、資料としての考古遺物や樺太アイヌなどに対する特別な関心を読み取ることができないということである。したがって、小稿が歴博所蔵の「柳田国男旧蔵考古資料」の検討に資することができる部分は少ない。

さて、付表をながめていきますと、まず気付くのは、「イナヲ」や「削り掛け」といった語彙である。『人類学雑誌』では早くからア

イヌの「イナヲ」や「内地」の「削り掛け」についての議論が交わされている。柳田による目印についても坪井正五郎「削り掛け再考」（通号一六、以下では番号のみ記す）をはじめとして、山中笑「御幣及び削掛の起り」（二二）、和田萬吉「削り掛けの事二件」（二三）、大矢透「削掛ト御幣」（二六）などに目印が付されており、論考名に「イナヲ」や「削り掛け」という言葉が入っていないものについても、本文のなかでこれらのテーマが扱われている論考については、たとえば鳥居龍藏「アイヌの木隅と云へる物」（一〇九）や同じく鳥居龍藏「思ふこと」（三二二）などを確認している。柳田の読みの注意深さが感じられる。では、柳田は自身のどのような論考を書くために、『人類学雑誌』でこれらのテーマをチェックしていたのであろうか。

柳田が「イナヲ」や「削り掛け」について触れた例としては「山島民譚集（二）」（一九二四年（大正三）ころ、執筆された時期については後述）所収「榎の杖」の「イナホ峠」についての記述が古い。ここでは「蝦夷地」の峠に「イナホ」とつく名が多いことを、「イナホは我々の所謂削り掛、即ちアイヌの中の御幣である。アイヌも亦境の山を越える際には之を立て、行途の平安を祈つたのである」と、『大日本地名辞書』の記述を参考にして論じている（柳田一九九七・五六八）。

しかし、具体的に『人類学雑誌』を参照した痕跡がうかがえるのは「日本の祭」の「祭場の標示」（一九四二年（昭和一七）以降である。この論考で柳田は「祭場の標示」としての「削り掛け」の古さについて、「現在はもうその削り花を長々と削り上げるだけの技術が衰へて、ほんの型ばかりのものを少し作るだけになって居るので、或は蝦夷の風俗の模倣でもあるかの如く、思つて居るやうな人さへ多いが、紙をシデに剪る智能なり資料なりが備はる以前は、削りかけが一ばん花やかな春の祭のシデであつたことは明かで、即ち祭人の手に持ち又は祭壇に立て、仰ぐ、是が唯一のしるしでもあれば又飾りでもあつた」と述べている（柳

田一九九八b・四一一）。

こうした指摘は、戦後になって書かれた「神樹篇」の「花とイナウ」（一九四七年（昭和二二））でも「考へて見れば誰にでも気のつく事実の一つは、紙といふもの、普及であつた。紙さへ手に入ればもつと真白な、もつと精確なシデ即ち目じるしを、祭の木に取付けることは容易であつた」と繰り返されているが（柳田一九九九・五七五―五七六）、これらは明らかに長谷部言人の「蝦夷はアイヌなりや」（三六八）における「イナオ、アイヌのイナウが人の目を惹くので万葉集筑波峯のイナオより削掛の類に至るまで、皆蝦夷即アイヌの残したる物件の如くに思はれて居るらしい。イナウは始原の形式のものではあり得ぬ。鋭利なる刃物があつて始めて出来るものである。尤も極々簡単な形式のものがあるが、之は寧ろ省略とも見られる。之に反して、我国の幣は頗る原始的形式を具へて居る。此の点より私はイナウは御幣の変形若は墮落であると思ふ」という考え方に対する反論である（長谷部一九一七・三二―三三三）。実際に、「柳田文庫」の『人類学雑誌』にはこの部分に柳田による目印が残されている。なお、同じく「神樹篇」の「鳥柴考要領」（一九五一年（昭和二六））で「イナオ」の「本来の用途は是を奥羽の鳥柴のやうに、狐の獲物をこの木の端に切掛けて、神を祭る習はしと結びついて居る」ことが永田方正の指摘として紹介されているが、これが『人類学雑誌』に掲載された永田方正の「アイヌ『イナウ』の聞書並「トクパ」は三易の原始と謂て可ならんか」（六〇）を引いたものであることは、柳田の目印からも明らかである。

以上から、柳田が一九四〇年代初頭から一九五〇年代初頭にかけて「イナヲ」や「削り掛け」についての議論を『人類学雑誌』に求めていたことが指摘できる。⁷⁾

つぎに、「山島民譚集」に収められた論考を確認したい。「山島民譚集」は、「河童駒引」および「馬蹄石」を収録した「山島民譚集（一）」につ

いてはその刊行年が一九一四年（大正三）と明らかなものの、「山島民譚集（二）」「山島民譚集（三）」は柳田の没後に大藤時彦が残された草稿をもとに再構成したものである。収録された各論考の執筆年の特定は難しいが、柳田自身は一九三九年（昭和一四）には、当初予定していた『山島民譚集』八巻一五テーマを早い段階ですべて書き上げていたと述べており（柳田二〇〇三・二三八）、一九一四年からそれほど時間の経ないうちに執筆されたことが推測される。

さて、「山島民譚集」では多くの情報が『人類学雑誌』から引き出されているが、一九一四年には確実に書き上げられていた「山島民譚集（一）」を例にとると、「河童駒引」において南方熊楠「河童に就て」（二二二〇）が引用されていることが確実である。柳田は『人類学雑誌』の同論考の「火車坊」「カシャンボ」という言葉に付紙をしており、「山島民譚集」の文中でも「南方熊楠氏報」として「紀州西牟婁郡満呂村」の河童にまつわる話を紹介している。

その他、柳田が『人類学雑誌』掲載の論考を参考にしながら論を進めているものとしてはダイグラボッチなどと呼ばれる巨人の伝説を扱った「大太法師」、宝物埋蔵伝説を扱った「朝日夕日」、隠里の所在を鶏が知らせる伝説を扱った「黄金の鶏」、そして川や塚などにまつわる、主に膳椀を借りる伝説を扱った「椀貸塚」があげられる。

「大太法師」では『人類学雑誌』からの直接的な引用はない。ただ、『人類学雑誌』においては山中笑「甲斐の落葉（六）」（二二一〇）で「昔レイボッチといへる大力の僧ありて」という記述に目印がつけられており、「大太法師」では後に書籍として刊行された『甲斐の落葉』から「鬼の足跡」といって三つの爪の足跡が残る大石の事例が引用されている。また、「故坪井理學博士論文目録」（三三二〇）においては『東洋学藝雑誌』に掲載された坪井の論考名「ダイイグラボウシの足跡と火の穴」に目印をつけている。

「朝日夕日」⁸⁾には『人類学雑誌』の第一四巻第一五五・一五九号と第一五巻一七一号を参照したことが明記されているが、これは坪井正五郎の「旭さし云々の口碑と古墳との関係」（一五五）、「再び『旭さし云々』の口碑に付て」（一五九）、「旭さし云々」の数例」（一七二）のことを指している。ただ、これら三本の坪井の論考のうち、柳田によるチェックが見られるのは第一七一号のみである。その他、柳田は同じく坪井正五郎の「対馬に於ける『旭さす』の伝説」（一八九）、柴田常恵「埼玉群馬両県下踏査概記」（二一六）、林魁一（書簡）「美濃に於ける『朝日さす云々』の歌」（二三〇）などにも目印を付けている。直接的な引用は見られないものの、柳田が『人類学雑誌』のバックナンバーにまで広く目をとおして情報を集めていた実態がよく分かる。

「黄金の鶏」については、黄金の所在を知らせる「精」としての鶏が、いつしか黄金で製造された鶏が埋められているという話にすり替わることがあるとし、つぎのような話を紹介している。「美濃揖斐郡養基村大字願成寺の稗蔵寺と云ふ寺の古い伝に、寺から東の方一里余に金の鶏が埋めであると云ふ。二三十年前に此伝説に依つて凡その見当をつけて同郡池田村大字東野字浄光寺河原の古墳を掘つた者があつたが徒勞であつた」（柳田一九九七c）。これは今西龍の「美濃国揖斐郡片山村附近の古墳」（二九六）の「前述禪蔵寺の東一里余の地に金鶏を埋めありといふ伝説あり。此地殆ど其方向なればとて十余年前発掘せし事あるも一物をも得ずして止みしといふ」との報告を引用したものである。

つぎに、「椀貸塚」については『人類学雑誌』から二本の論考が参照されていることが明らかである。一本は須藤求馬の「加賀国河北郡小村大字伝燈寺及び長屋横穴測定表並に考説」（一一八）であり、穴の大きさなどの考古学的データも紹介しているが、内容としては椀貸穴の紹介にとどまっている。もう一本は柴田常恵の「越中国氷見郡宇波村大境の白山社洞窟」（三七五）である。直接的には「能登国名跡志」（年未詳）

を参照したことになっているが、「柳田文庫」の『人類学雑誌』の柴田による同稿にも柳田の目印がつけられている。こちらでも考古学的な報告であるが、目印を見る限り、柳田の関心は椀貸しの伝説のみに払われている。

「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』には、これらのテーマの他にも年中行事、婚姻などの人生儀礼、入墨や鉄漿といった装身の慣行、方言、アイヌなどに柳田の目印が確認される。また、道祖神や左義長、猿田彦、陽物など、「石神問答」へと接続するテーマにも強い関心が寄せられている⁽¹⁾。

そうしたなか、とくに注目しなければならないのは、「横穴」や「塚」を取りあげた論考に柳田の目印が多く付されているということである。「石神問答」にしろ「山島民譚集」にしろ、「塚」や「横穴」といった考古学的遺構とそれに付随する名称や伝説を素材として過去を明らかにしようとする論考である。明治末から大正初頭にかけての柳田の関心はまさにこうした問題にあり、それは一九一二年（明治四五）の「不思議にも我々の過去を語るものは、一方には口から耳へ伝へて行く所の村々の伝説と、他の一方には、地表に建造せられた塚と森と、半ば天然の地形を利用した巖を以て作った土窟の類である」（柳田二〇〇六・一〇一）という柳田の宣言から明確に読み取ることができる。

そこで興味深いのは、こうした柳田の視点が、当時の考古学的研究への批判を軸に展開しているということである。たとえば、「山島民譚集」の「朝日夕日」では、「朝日さす夕日かゞやく木の下に子孫に残す朱瓶千杯」などの宝の所在を知らせる歌について、「旭さし云々は塚を築く時人夫の謡つた歌で有らう、其歌を地方で伝へて居るので、此の歌の存する所、即ち塚の存在する所、或は存在した所と考へて宜からう」という坪井正五郎の説について「坪井一九〇〇・三五八」、「何分にも之に基いて古代の節と文句とを想像しにくいのみならず、其思想も墓造りの場

合に相応して居らぬ」と真つ向から否定したうえで（柳田一九九七c・六一四）、自らの論を構成している。

また、「一目小僧その他」の「隠れ里」でやり玉に挙げられるのは鳥居龍藏である。柳田は「隠里」の冒頭で、鳥居が講演でアジア諸民族で行なわれる無言交易の話のなかで「今日日本の各地方に存する椀貸伝説は亦一種の無言交易である。伝説学者は大抵の事を皆伝説にしてふ傾きがあるが、椀貸などは実はエスノグラフィの方の材料である」と述べたことに触れ、「若し此伝説の語るやうな土俗が曾てあつたと言ふならば勿論誤謬、若し又是が昔の或土俗の訛伝である痕跡であると言ふのならば、御説を須たずして恐らくは誰も否とは云ふまい」と切り捨てる（柳田一九九八a・四九八）。

このように、伝説を史実と解し、遺跡と直接的に結び付けようとする当時の考古学的な手法に柳田は批判的であった。柳田にとって「塚」は「説明しえない過去」として「発見」された「異文化」であった。そして、「意味不明であるからこそ、安易な推論や類推を切斷し、組織的な観察を積み上げ、考えなければならぬという立場」を強調したのである（佐藤二〇一五・二三九）。こうした考古学的研究への批判と同時に、無形の資料を扱うための方法論が模索されはじめたのである。

おわりに

以上、小稿では民俗学の成立に大きな影響を与えたことが予想される『人類学雑誌』と民俗学を創始した柳田国男との関係を明らかにしようとする今後の研究に資するため、柳田による目印が残された成城大学民俗学研究所「柳田文庫」所蔵の『人類学雑誌』の論考の一覧を作成し、さらに、この一覧の作成過程で筆者が気づいた点について若干の言及をした。

小稿の目的はあくまでも一覧を公開することによって、民俗学史研究

および柳田国男研究の進展を促すことにある。その意味では、『考古学雑誌』など、『人類学雑誌』と同時代の他の文献に掲載された論考についても、同様の手法で柳田の関心を整理することが必要となろう。稿を改めて取り組みたい。

さて、最後に柳田の『人類学雑誌』に対する思いについて触れてこの稿を閉じたい。

一九三〇年（昭和五）の『人類学雑誌』第四五巻第五号の「会報」の欄には、この年の四月一九日に行なわれた第四二七回例会における柳田の講演「社会人類学の方法及び分類」の要旨が掲載されている（『東京人類学会一九三〇：二一〇』）。そのなかで柳田は「学問の利益の上から見て社会人類学と体質人類学とはすつかり分離してふことは当を得てゐない」と、自然人類学一色となった当時の東京人類学会および『人類学雑誌』を批判している。

柳田による当時の人類学会に対する批判の内容は、その前年、一九二九年（昭和四）に『人類学雑誌』第四四巻第六号（第五〇〇号記念号）に発表された「葬制の沿革について」の冒頭に明らかである。柳田は「近年の日本の人類学が、非常に片寄つた発達をした」と自然人類学に偏重する『人類学雑誌』の当時の傾向に対し、「人類学の前面が本来は広いものであること、従つて偶然に又散漫に我々が抱いて居る個々の小さな疑問の中にも、まだ幾らでも学問上の疑問があり得るといふことを、出来るだけ意外な実例に由つて心付かせて貰ふことは、所謂追隨を許さぬといふ学者の深入した指導よりも、全体の効果は時として大きかつた」と主張する（『柳田二〇〇一：九四―九五』）。

しかし、柳田の「葬制の沿革について」と同じ号に、「序」として第五〇〇号記念の挨拶を寄せた小金井良精の考えは全く異なっていた。解剖学者であった小金井は「故坪井正五郎氏は既に本会設立の際に於て、この考古学的調査が本旨ではないといふことを充分に認識せられて、本

会の目的たる人類の本質、現状、由来を研究する一部分として遺跡、古物を調べるのであると明かに唱道せられてゐる」としたうえで、「形体的人類学と精神的人類学と相提掇して進む」ことを重視しながらも、「殊に近年著しく目立つことは、人類形体に関する論文が多くなつた。これは本誌のために甚だ喜ぶべきこと」と述べているのである（『小金井一九二九：巻一参』）。

柳田が共感していた坪井正五郎の描いた人類学像は、小金井の認識とは大きく異なるものであった。すなわち、自然人類学と、考古学や文化人類学、民俗学、言語学といった幅広い分野を包摂した学問としての社会人類学とが協業する「人類に関する自然史／博物学 (natural history)」としての人類学である。それは、小稿で紹介した、柳田が『人類学雑誌』を読んだ痕跡を確認しても明白であろう。

先にも述べたように、柳田は『人類学雑誌』の第四三巻以降に目印を付けていない。それはおそらく、『人類学雑誌』に掲載される論考が、柳田の関心から遠いテーマの「精透な研究」ばかりになってしまつたからであろう。そうしたなかで、自らを鼓舞し「今度の五百号の好記念の日を始にして、又僅かづゝの問題なりとも提出して、同志の会員諸君がどの程度に、又如何なる種類の題目に興味をもち、且つ新しい資料と判断とを以て、応援してくれられるかを試みてみようと思ふ」と述べた柳田であったが（五〇〇）、これが『人類学雑誌』への最後の投稿となつた。

この段階で柳田の意見に耳を傾ける東京人類学会の会員がいれば、民俗学も現在とは多少異なつた姿となつていたかもしれない。柳田は上述の講演要旨「社会人類学の方法及び分類」で有形のものを扱う考古学に對して、無形の部分を扱う研究の態度が「眼で見られるもの（生活様式）」「耳で聞くべきもの（生活解説）」「感情に訴へるもの（生活観念）」の三つに分けられるとしている。これは後に「民間伝承論」などで示される資料の三部分類に通じるものではあるが、興味深いのは上記の引用に続

く「ナショナルな社会人類（学）はこの最後のものによるべきであり、殊に日本はその点で恵まれてゐる」（丸カッコ内は引用者が補足）という一文である。すなわち、三つの「態度」のうち、一と二については当時の『人類学雑誌』に論考や報告が掲載されていた外国や植民地を対象とした民族学とは変わらず、三のみが一般的な民族学あるいは社会人類学と「ナショナルな学問」としての社会人類学、すなわち「日本人類学」とを区分する所以となるのである。これは当時の柳田が自らの構想する学問を、形質人類学と補完しあつて大きな枠組みとしての人類学を構成する社会人類学の一部として認識していたことを意味するのではないだろうか。

謝辞

小稿の執筆にあつては成城大学民俗学研究所に全面的なご協力をいただいた。同研究所所長の松崎憲三先生、茂木明子氏、林洋平氏に深く感謝申し上げる。

註

- (1) 本論考は創刊第一巻（一八八六年（明治一九））から坪井の死去する第二八巻（一九一四年（大正三））までを対象としている。
- (2) 曾我部らは坪井正五郎が整理した人類学の八部門、すなわち「形体門」「心理門」「工芸門」「器物門」「風俗門」「習慣門」「言語門」「原人門」のうち「風俗門」と「習慣門」に注目し、これらを一括して「生活慣習」と呼んで「民俗学との連続性」を見出している（曾我部・及川・今野二〇〇七：一一八）。
- (3) 柳田による蔵書へのチェックにはペンや色鉛筆による書き込みのほかにも付箋や付紙が見られる。
- (4) ただ坂野は、こうした坪井の人類学観が特異なものではなく、同時代の西欧においても広範な領域を有する学問として人類学が捉えられていたことも指摘している（坂野二〇〇五：二一九）。
- (5) 第二巻第一六号については合本されず単独で所蔵されている。
- (6) もちろん、『人類学雑誌』をまったく手に取ることなく入会を決議することは

考えにくく、入会以前も何らかの手段で『人類学雑誌』を読んでいた可能性は高い。たとえば、一九〇六年（明治三九）年にサハリンを訪れた際の日記をもとに書かれた「明治三十九年樺太紀行」（一九五八年（昭和二三））に、アイヌ・コロポックル論争にもとづく記述が見られることはその証左と言えよう。

- (7) 管見のかぎり、『人類学雑誌』からの引用が明記されている柳田の論考のうちもっとも古いものは、一九二二年（明治四五）六月に『考古学雑誌』第二巻第一〇号に発表された「勝善神」である。柳田は『人類学雑誌』第二五巻第二九一号掲載の南方熊楠の論考「本邦に於ける動物崇拜（追加）」（二九一）から、象の病難予防のために猿を象の小屋で飼うというインドの事例を引用している。「柳田文庫」の『人類学雑誌』には〇印がつけられており、柳田がこの南方の論考を読んだ形跡が確認できる。ただし、それはインドの事例の箇所ではなく、猿に対する安産にまつわる信仰についてである。

- (8) 柳田は「此種の口碑に就ては自分は明治三十六年から注意をし始めた」と述べている（柳田一九九七：六二三）。その「注意」が、こういった情報源に向けられていたのが興味深いところである。

- (9) この今西の報告は一九〇二年（明治三五）七月の『人類学雑誌』第一九六号に掲載されたものであるが、金鶏の発掘が行なわれたのがその一〇年余り前だという。柳田は「三十年前」に実際に発掘してみた人がいたとしていることから、これらの記述を信じるのであれば、「黄金の鶏」の執筆時期は一九一二年（明治四五）から一九二三年（大正一）ころと推定される。これは「山島民譚集（二）」以降の論考を早い段階で書き上げていたとする柳田の言を裏つけるものである。

- (10) カタツムリの地方名に関しても柳田による目印が多い。一九二七年（昭和二）に柳田の「蝸牛考」が発表されたのも『人類学雑誌』誌上である。また、一九三五年（昭和一〇）以降発行された『産育習俗語彙』や『婚姻習俗語彙』などの一連の「習俗語彙」もまた、『人類学雑誌』をその典拠の一つとしており、柳田の目印と一致する語彙も少なくない。

- (11) たとえば、外崎寛蔵「陸奥津軽郡湯口村古物発見」（二七）、出口米吉「本邦生殖器崇拜略説」（一九二）、同「正月十五日の道祖神祭につきて」（一九三）、同「左義長考」（二六三）などがあげられる。

参考文献

赤坂 憲雄 一九九七『山島民譚集 解題』（柳田国男全集 二 筑摩書房）
 大藤 時彦 一九九〇『日本民俗学史話』三一書房
 小金井良精 一九二九「序」（『人類学雑誌』四四一六）
 坂野 徹 二〇〇五『帝国日本と人類学者——一八八四・一九五二——』勁草書房

- 坂本 要 一九八八「変態と風俗研究―日本民俗学前史―」(桜井徳太郎編『日本民俗の伝統と創造』弘文堂)
- 佐藤 健二 二〇一五『柳田国男の歴史社会学―続・読書空間の近代―せりか書房
成城大学民俗学研究所 二〇〇三『増補改訂 柳田文庫蔵書目録』
- 関 敬吾 一九五八『日本民俗学の歴史』(『日本民俗学大系 二 日本民俗学の歴史と課題』平凡社)
- 曾我部一行・及川祥平・今野大輔 二〇〇七『人類学雑誌』考―民俗学の揺籃期―
(『成城文藝』二〇一 成城大学文学芸学部)
- 東京人類学会 一九三〇「例会」(『人類学雑誌』四五・五)
- 柳田 国男 一九五八「明治三十九年樺太紀行」(『心』一一一七 心編集委員会)
- 一九九七a(一九一四)「山島民譚集(一)」(『柳田國男全集』二 筑摩書房)
- 一九九七b(一九六四)「山島民譚集(二)」(『柳田國男全集』二 筑摩書房)
- 一九九七c(一九六九)「山島民譚集(三)」(『柳田國男全集』二 筑摩書房)
- 一九九八a(一九三四)「目小僧その他」(『柳田國男全集』八 筑摩書房)
- 一九九八b(一九四二)「日本の祭」(『柳田國男全集』一三 筑摩書房)
- 一九九九(一九五三)「神樹篇」(『柳田國男全集』一九 筑摩書房)
- 二〇〇一(一九二九)「葬制の沿革について」(『柳田國男全集』二八 筑摩書房)
- 二〇〇三(一九一四)「予が出版事業」(『柳田國男全集』三〇 筑摩書房)
- 二〇〇六(一九二二)「塚と森の話」(『柳田國男全集』二三 筑摩書房)
- 山中笑(共古) 一九二六『甲斐の落葉』郷土研究社
- 吉田 東伍 一九〇九『大日本地名辞書』統編 富山房
- 和歌森太郎 一九七六『日本民俗学講座 五 民俗学の方法』朝倉書店
- 渡辺 直經 一九九二「人類学雑誌一〇〇巻の回顧(一)―創刊から坪井会長長逝去まで―」(『人類学雑誌』一〇〇―二 日本人類学会)

〈ウェブサイト〉

日本人類学会「人類学会の歴史」

<http://anthropology.jp/about/history.html> (二〇一五年七月一四日)

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇一五年七月一七日受付、二〇一六年一月二九日審査終了)

別表 柳田国男の目印が残された『人類学雑誌』掲載の論考

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
1	M20	1887	2	16	16	削り掛け再考	坪井正五郎	228	f
2			3	21	21	御幣及び削掛の起り	山中笑	40	f
3						阿波の風俗	鳥居龍蔵	51	c
4						藁製の牛馬	上田英吉	51	l
5				22	22	埼玉県横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探検記, 下篇	坪井正五郎	55	cl
6						北吉見村横穴壁面に在る古代彫刻	坪井正五郎	62	cs
7						相模国海老原郡大磯及び山西村横穴実見記	若林勝邦	66	l
8						削り掛けの事二件	和田萬吉	73	l
9						土蔵塗納メノ祝	糞虫	78	l
10						石戦の遺風	若林勝邦	79	l
11	M21	1888		24	24	飛騨山中ノ年ノ始(上竇村及び丹生川村等)	室徳三	122	cklm
12						肥後山本地方の年の始	深迫弘庸	124	ckls
13						武蔵松山の年の始	坪井正五郎	125	cl
14						御田植祭りノ事	月岡追風	127	l
15						御判ジノ事	月岡追風	127	c
16						飛騨国ノへとかち式	室徳三	128	cl
17						志ろかけ御祝儀	羽柴雄輔	129	k
18				25	25	羽前国西田川郡山五十川村ニ長寿ノ者多キ事及方言	羽柴雄輔	149	klm
19						竪穴ノ遺風今尚荘内地方ニ存セリ	羽柴雄輔	152	l
20						古船説	山崎直方	156	l
21						羽前国西田川郡大広村の年の始	羽柴雄輔	160	bclmy
22						羽後飽海郡の年始風俗	羽柴雄輔	164	bk
23				26	26	削掛ト御幣	大矢透	168	cklm
24						土佐国ノ婚姻	寺石正路	183	clm
25						佐渡国加茂郡吉井本郷近村陰曆十二月ヨリ正月中年始ノ式(十二月ヲくろめト云フ)及び習慣	K. W.	184	lm
26						羽後国年始風俗	平野虎吉	185	cls
27						古船 尾張国にて古船並仏像を掘りし事(松岡氏見聞雑記所載)	神風 山人	191	cs
28				27	27	法律学ト人類学トノ関係	鈴木券太郎	199	l
29						神風山人君の説を読み再び黒岩北吉見両村の横穴は穴居の為に作りしものならんとの考えを述ぶ	坪井正五郎	216	l
30						三十国巡回日記, 第一回	坪井正五郎	225	cfl
31						羽後国北秋田郡綴子村年始ノ風習	泉澤恒蔵	233	cfmsy
32						周防国徳山年始風俗	長坂鉄吉	234	cl
33						越後年始風俗	吉田東伍	235	clm
34						羽後国南秋田郡秋田町鎌倉祭	泉澤恒蔵	236	l
35						陸奥津軽郡湯口村古物発見	外崎覚蔵	237	l
36						魂魄ヲ帰来セシメントスル俗	羽柴雄輔	238	lm
37						次号原稿		238	l
38				28	28	風俗測定成績及び新案	坪井正五郎	250	f
39						三十国巡回日記, 第二回	坪井正五郎	258	cl
40						河内国高安郡塚穴遺跡実見記事	山崎直方	261	cl

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
41						淫祀の研究	羽柴雄輔	278	cl
42				29	29	豊前国田川郡夏吉村横穴探検記	小川敬養	291	cl
43						飛騨ノ風俗及其他	藤森峯三	305	clmy
44						肥後婚姻風俗	深迫弘庸	316	clm
45						備前備中美作の婚姻(風俗其一)	鈴木券太郎	316	clm
46						沖縄県下宮古島及沖縄島対訳方言集	田代安定	324	cklm
47			4	32	32	西海旅行記 第一回	若林勝邦	11	c
48				33	33	方言取調ヲ賛成スル事及荘内方言表	羽柴雄輔	64	clmt
49						長野県川中島地方方言		71	c
50						アイノ前ノ人種ニ関する口碑	鈴木券太郎	74	t
51				34	34	食人風習ニ就テ述ブ	寺石正路	84	f
52						日本古今文字通考中篇甲	かねこあきら	91	f
53						志摩国英虞郡和具郡ニツキテ	古坂生	106	cfmt
54						壱岐国風俗及方言	菊池吉祥	115	cf
55	M22	1889		35	35	東京、西京及び高松に於ける風俗測定成績	坪井正五郎	138	f
56						遊初島記	三浦謹之助	144	cfm
57						東北地方旅行見聞	佐藤重紀	152	cf
58						本邦古代法取調項目	鈴木券太郎	160	fl
59						飛騨国大野郡高山町方言略表	田中正太郎	178	cf
60						各地方言表	羽柴雄輔	182	cklm
61						群馬方言	若林勝邦	185	ck
62				36	36	左衽ノ風俗	寺石正路	191	clm
63						壱岐国風俗後報	菊池吉祥	203	clmt
64						患部を書きて神社に納むるの風習	名和靖	206	f
65						方言研究の材料 旧稿小椋雑誌(非印本)ヨリ抄出ス	坪井正五郎	209	cfklmy
66				37	37	日本語ト朝鮮語トノ類似	大矢透	265	t
67						因幡国鳥取方言表	加茂元善	266	ckt
68						陸中国鹿角郡婚姻風習	泉澤恒蔵	270	cl
69						白野夏雲氏の北海道地名解の双六	じんぼうことら	274	cf
70				38	38	福島県石川郡龍崎村其他横穴探検記	犬塚又兵	295	t
71						居宅ノ戸口ニ掲出セル魔除厭勝ノ類	石井民司	306	cf
72						今日日本ノ言語	大久保初男	318	cl
73						滋賀県下高嶋郡今津方言	加茂元善	336	l
74						伊豆国加茂郡方言表	鳥居邦太郎	337	cl
75						福島県下岩代国安積郡多田野方言表	鳥居邦太郎	338	ck
76						福井県越前国今立郡襄陽方言表	鳥居邦太郎	339	ct
77						和歌山県下紀伊国日高郡印南方言表	鳥居邦太郎	340	c
78						岩代国安積郡中央部方言	石井民司	341	ck
79				39	39	陸奥国上北郡法量村	田口主税	376	cfm
80						越中国砺波郡方言集	三村釵吉	378	cfkl
81						下総国猿島郡方言表	東宮鉄真呂	380	c
82						陸中国磐井郡山ノ目方言表	大久保初男	382	c

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
83						岩手県下陸中国きた岩手郡沼宮内方言表	鳥居邦太郎	383	cklt
84						沓岐国方言	菊地吉祥	384	clt
85				40	40	前回数後寄附品及び寄贈者ハ左ノ如シ		389	l
86						門口に掲出す御守の話	山中笑	402	ft
87						年始風俗彙報(承前)	佐藤重紀	414	cl
88						上総国長柄郡一ノ宮方言表	大久保初男	416	ckl
89						加賀国金澤方言表	大久保初男	417	cmt
90						備後国沼隈郡草戸方言表	鳥居邦太郎	420	cl
91						大坂ニ於ケル風俗測定及欧化ノ波動	塚本巳之吉	430	f
92				41	41	陸奥国年未年始風俗彙報(承前)	佐藤重紀?	438	fl
93						周防国都濃郡徳山方言表	長坂達郎	443	clt
94						越後國中蒲原郡五泉町方言表	大久保初男	444	cm
95						下野国芳賀郡方言表	東宮鉄真呂	445	ck
96						備後国福山方言表	保多守太郎	447	c
97						加賀国金澤地方方言表	梅村迷子	448	ck
98				42	42	「アイヌ」の婦人(大日本婦人教育会にて)	坪井正五郎	453	cflm
99						旧化生存の話	鈴木券太郎	459	cf
100						豊前小倉方言表	会員某氏	493	cl
101						駿河国富士郡下等人民方言表	角田虎男	495	cm
102						山城国京都方言表	大久保初男	499	c
103						土佐国長岡郡国比左村方言表	大高坂守衛	500	c
104						土佐国高知市方言表	鳥居邦太郎	501	c
105						越中国富山方言表	鳥居邦太郎	502	ct
106				43	43	日本上古風俗図考第二(土中ヨリ人家二戸現ル(卷末ノ図ヲ見ヨ))	宮澤運治	508	lmt
107						日本上古風俗図考第二(古木器出現の記)	土岐襄蟲	509	clm
108						東京ニ於ケル風俗測定成績	鳥居邦太郎	524	f
109						妄信ノ材料 第二。	石井民司	527	m
110						莊内に於て得たる魔除厭勝の材料	羽柴雄輔	528	clm
111						陸奥国上北郡年始風俗(つゞき)	佐藤重紀	530	clmts
112	M23	1890	6	55	55	第六年会編輯事務報告	三宅米吉	7	clmy
113						薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ	田代安定	18	clmy
114						越前ノ遺跡遺物及別家ノ称呼, 村名	月輪眞成	38	o
115				56	56	薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ(続)	田代安定	46	clmt
116				57	57	薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ(続)	田代安定	79	clmsy
117						陸奥弘前土族某家(世録二百石)年中行事一斑	下澤保躬	110	clms
118	M24	1891		58	58	ハワイ通信	岡部政治	145	clm
119						信濃国東筑摩郡松本町之婚姻風習	田中正太郎	147	s
120						越中国砺波郡城端町婚姻風習	田中正太郎	147	t
121				59	59	ロンドン通信	坪井正五郎	161	cl
122						衆議院議員氏名ノ解剖	鈴木券太郎 若林勝邦	167	ly
123						肥後国五家荘人民ノ生活	石井八万次郎	175	cls
124						陸奥国東津軽郡大野村大字細越年未年始の風俗	角田猛彦	177	cklmt

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
125						流行病予防のまじなひに就て	鈴木券太郎	185	c
126				60	60	薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ(前号ノ続き)	田代安定	191	clm
127						遺風研究の中 正月十四日十五日の風習儀式	鈴木券太郎	195	clmt
128						アイヌ「イナウ」の聞書並「トクバ」は三易の原始と謂て可ならんか	永田方正	220	clmy
129						阿波の削り掛	鳥居龍蔵	224	cm
130				61	61	越前竹田正月ノ風俗(北陸新報ヨリ摘記ス)	吉野芳	260	t
131				62	62	「タフ」ノ事	寺石正路	301	t
132				65	65	宝谷の人穴実見談	羽柴雄輔	389	l
133						地理上ノ「アイヌ」語	岡部方幾	399	cl
134			7	68	68	檳榔子を嚼む風習。	佐藤重紀	46	f
135				69	69	瀛津島紀行	江藤正澄	74	fm
136						江談抄ニ出アタル波斯語	三宅米吉	106	f
137	M25	1892		72	72	あいぬノ宗教並ニ口碑	ジョン、バッチェリア	198	f
138				73	73	大和十津川郷風俗一斑	山崎直方	251	m
139				74	74	陸奥に於けるアイヌの紀念	佐藤重紀	272	m
140						南部方言	佐藤重紀	282	cft
141				75	75	南部方言	佐藤重紀	319	fmt
142			8	80	80	海南諸島宗教考篇祝女部すなわち祭神職	田代安定	44	clmsy
143	M26	1893		82	82	沖繩県記標文字説	田代安定	115	f
144						本会へ寄贈されたる最近諸雑誌中に在る人類学上の材料	坪井正五郎	137	c
145						徳島の佐吉長	鳥居龍蔵	146	cfm
146				83	83	沖繩県記標文字説(続)	田代安定	170	flm
147						小児の計算言葉と商家の符牒	羽柴雄輔	177	f
148						No.138 Second Contribution to the Study of Folk-Lore in Philadelphia and Vicinity.	Henry Philips	196	c
149				84	84	一産多子に就き	羽柴雄輔	234	f
150				85	85	鹿児島県下大島郡島雑辞	田代安定	257	c
151				86	86	人類学研究の趣意	坪井正五郎	318	f
152						南洋諸島に行はるゝタブー制の話	坪井正五郎	326	c
153						日本ノ蝸牛(五)	飯島魁	卷末	cf
154				89	89	小児の判断法	羽柴雄輔	450	cfi
155						アイヌの入れ墨	坪井正五郎	458	f
156				90	90	アイヌの入れ墨(続稿)	坪井正五郎	492	f
157			9	92	92	一産多子に就き 二回	羽柴雄輔	58	f
158						船木ノ神トオキクルミノ話	ウレンキシマ訳	82	t
159				93	93	東洋博言学研究の必要	岡倉由三郎	88	f
160	M27	1894		94	94	土俗会談話録(羽前、越後、信濃、肥後の正月其他)	鳥居龍蔵 小林庄蔵 稲葉包通	144	cfm
161						越中旅行見聞録	田中正太郎	156	f
162				95	95	土俗調査より生ずる三利益	坪井正五郎	170	f
163				98	98	奥州地方に於て尊信せらるゝオシラ神	伊能嘉矩	304	flm
164				99	99	人類学の発達	坪井正五郎	表紙	l

No.	和暦	西暦	巻	号	通号	論考名	著者	頁	目印
165				101	101	妄信百五十件	神田喜三郎 集	452	c
166			10	103	103	妄信録	川角寅吉	32	cm
167				104	104	カジキ及び其名称の分布	鳥居龍蔵	56	f
168				105	105	日本上古ノ焼物	三宅米吉	94	f
169						アイヌの墓標(付図)	坪井正五郎	巻末	ft
170	M28	1895		106	106	アイヌ紋様と軀絵との関係	坪井正五郎	128	f
171						アイヌのチツキリと飛驒のサシキリ	田中正太郎	135	f
172						妄信材料	和田千吉	159	f
173						妄信材料拾遺	岡虎三	168	c
174				108	108	播磨国飾東郡北條村に於ける人身御供の遺風	和田子吉	244	cfl
175						羽後国男鹿半島ノ土俗	佐藤初太郎	248	ckmt
176						飛鳥風俗図画	羽柴雄輔	253	t
177				109	109	アイヌの木隅と云へる物	鳥居龍蔵	255	lm
178						伊豆国新島のヤカミシユ	鳥居龍蔵	261	cflmt
179						磐城岩代両国地方ニ於ケル古墳談 附横穴説	犬養又兵	264	t
180						妄信録第二	川角寅吉	272	cft
181						妄信材料, 第二	田中正太郎	278	clt
182						福島県下諸遺跡	某氏	286	t
183				110	110	秩父地方に於ける人類学的旅行	阿部正功 大野延太郎 鳥居龍蔵	304	ft
184						琉球群島に於ける人類学上の事実	笹森儀助 抜書	317	ft
185				111	111	琉球群島ニ於ケル人類学上ノ事実(承前)	笹森儀助 抜書	371	ft
186						妖怪学講義録	井上円了	巻末	t
187				112	112	各地発見ノ埴輪類(第百九号ノ続)	八木奘三郎	390	lm
188				113	113	伊豆新島の土俗	坪井正五郎	421	clmts
189						琉球群島ニ於ケル人類学上ノ事実(承前)	笹森儀助 抜書	446	t
190			11	115	115	第三回土俗会談話録(北海道土人)	パット レン	24	t
191						第三回土俗会談話録(磐城国田村郡巖江村白岩)	青山正	32	clms
192						第三回土俗会談話録(新潟県西蒲原郡上坂井輪村)	宮永平吉	33	lm
193						第三回土俗会談話録(下総北相馬郡)	岡田毅三郎	40	fl
194				116	116	伊豆利島ノ土俗	水越正義	62	f
195						宮古島の洗骨	林若吉	76	clm
196	M29	1896		118	118	伊豆大島土俗観察の記	山崎直方	154	flmts
197						加賀国河北郡小金村大字伝燈寺及び長屋横穴測定表並に考説	須藤求馬	162	t
198				120	120	北陸地方に於ける人類学上の所見	八木奘三郎	231	ft
199				123	123	陸前国黒川郡全部土俗一斑	布施千造	363	clmtsy
200						羽後国男鹿半島の土俗	佐藤初太郎	373	c
201				124	124	四国人類学会発会式に際してドクトル, ハントの略伝を述ぶ	坪井正五郎	378	f
202				125	125	北陸地方に於ける人類学上の所見(百二十号の続)	八木奘三郎	430	f
203				126	126	越後国三面村の土俗	宮島幹之助	482	cfmt
204			12	128	128	育児風習	土俗会?	50	f
205	M30	1897		130	130	往古の日本人は身体巨大なりしとの説の当否	坪井正五郎	154	ft

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
206				131	131	飲食に就ての人類学的観察	坪井正五郎	165	f
207						人類学的見聞記	布施千造	209	ft
208				132	132	琉球俚諺 第一篇(沖縄島)	黒岩恒	241	ft
209						沖縄人類学会の設立		253	f
210				133	133	阿波国祖谷土俗調査	中井伊與太 曾木嘉五郎	273	ft
211				135	135	甲斐の贈答風習	中山笑	370	t
212				136	136	日本諸地方の食事に関する事実	土俗会?	411	f
213				138	138	本邦石器時代の膠漆的遺物に就て	佐藤伝蔵	471	ft
214	M31	1898	13	142	142	イクパシユイ(即ち所謂髭上げ籠)	坪井正五郎	144	f
215				143	143	琉球俚諺 第一篇(沖縄島のつゝき)	黒岩恒	184	f
216			14	151	151	第六回土俗会速記録(承前)(編者曰問題は諸地方の妄信俗伝なり)	土俗会?	13	f
217	M32	1899		154	154	琉球土俗調査存稿	黒岩恒	149	f
218						常陸国稲敷郡福田村貝塚発掘ノ実景	大野延太郎	卷末	f
219				157	157	壱岐に於ける人類学上の調査	八木契三郎	249	f
220				159	159	常陸上青柳地方ノ妄信俗伝	羽生英雄	364	cklmts
221				161	161	本邦人陰茎の包皮に就て	足立文太郎	428	f
222						琉球ニ於ケル妄信俗伝及ビ児童語	友寄喜直	451	cfms
223			15	164	164	伊豆国利島の住民	水越正義	43	cfklmts
224						武相境界奥部に於ける石器土器の分布に就て	青木純造	70	fm
225				165	165	東北地方に於ける人類学的旅行	八木契三郎	89	f
226						武相境界奥部に於ける石器土器の分布に就て(承前)	青木純造	96	f
227	M33	1900		168	168	美濃国郡上郡地方古物及び土俗	林一	222	ft
228				169	169	日本の「積み石塚」	坪井正五郎	277	t
229				170	170	旭さし云々の一例	濱田耕作信書	340	f
230				171	171	琉球及大嶋群島婦人の黥	吉原重康	345	f
231						「旭さし云々」の数例	坪井正五郎	355	cf
232				172	172	伊豆国新嶋の土俗を調査し本邦古代の遺風最多き所以を論ず	水越正義	387	cfmts
233			16	175	175	沖縄の「オガミ」並に「オモロ」双紙に就て	加藤三吾	23	bclm
234				177	177	米沢地方の七夕, 墓参, 盆踊	石田角彌	107	l
235	M34	1901		178	178	三河国考古資料二則	宇都宮勉爾	156	mt
236						妄信録第三	川角寅吉	158	lts
237				179	179	家標考	栗源保二郎	186	f
238				180	180	大分県下の古墳及横穴	武田安之助	233	t
239						紀伊国妄信俗伝	岡本彌	237	ct
240				181	181	イムバツコ(アイノ人に於ける一種の官能神経病)に就て	榊保三郎	249	cklt
241						韓人間に行はるゝ冠り物の種類	八木契三郎	263	fl
242						伊豆初島旅行談	内田銀蔵	274	cfm
243				182	182	粥杖考	出口米吉	297	fls
244						考古人類学的本邦涅槃習俗調査に就ての主題並に質問案		336	ckm
245				183	183	伊豆初島旅行の談(第百八十一号の続)	内田銀蔵	349	cfl
246						沖縄通信(をかん, 仮面, 舞踏, 丸木弓, 古鏡, 曲玉等の)	加藤三吾	353	f
247						台湾の生蕃に於ける一種の官能神経病	伊能嘉矩	361	fm

No.	和暦	西暦	巻	号	通号	論考名	著者	頁	目印
248				184	184	陸前の積石塚	原秀四郎	426	f
249						尊崇を受けた榊	山田都右衛門	428	ct
250				186	186	土俗比較談	水越正義	482	cklms
251						陸奥国八戸地方に於ける涅槃習俗に就て	河村末治	486	cls
252						伯耆国西伯郡高麗山麓の古窟附たり坪井博士の探討	足立正	513	ls
253			17	188	188	沖縄考古土俗雑話	加藤三吾	43	ft
254						琉球横穴	坪井正五郎	78	ft
255				189	189	沖縄通信(坪井理科大学教授宛)	加藤三吾	121	mt
256						対馬に於ける「旭さす」の伝説	坪井正五郎	122	t
257	M35	1902		190	190	阿波国木頭山土俗	玉置繁雄	140	cfklmts
258				191	191	我質問に対する答文	鐵林庵主涅	201	cfkm
259				192	192	本邦生殖器崇拜略説	出口米吉	217	t
260						阿波の銅鐸及び古墳	玉置繁雄	218	t
261				193	193	正月十五日の道祖神祭につきて	出口米吉	272	f
262				194	194	人柱に関する研究	布施千造	303	f
263				195	195	薩南大島の話	昇直隆	343	cfmmt
264				196	196	人類学の参考学科としての説文学	長井行	385	k
265						大野雲外氏の埴かめ(公の下に瓦)説に就て	蒔田鎗次郎	391	l
266						美濃国揖斐郡片山村附近の古墳	今西龍	422	t
267				197	197	拙稿「岐神考」に対する三溪氏の評論(再版日本社会事彙所載)につきて	出口米吉	432	t
268						蝦夷の楯先	八木樊三郎	436	f
269				198	198	日本石器時代人民に就きて余か疑ひ	濱田耕作	490	l
270						コロボックル論に関する濱田氏の疑問に付いて	坪井正五郎	487	l
271			18	200	200	表出と云ふ語の意味について	前田不二三	43	f
272						甲斐の落葉	山中笑	58	cm
273				201	201	琉球雜記(一)	加藤三吾	95	cm
274						薩南大島に於ける節句、儀式及び遊戯	昇直隆	107	c
275						隠岐国海士郡海士村地方涅槃習俗(上下を通じ一般に)	高山青嶂	117	cl
276	M36	1903		205	205	日向国宮崎郡青島村地方涅槃習俗	高山青嶂	286	clm
277				206	206	瘧疾に関する迷信(宮島幹之助君に答ふ)	窪美昌保	315	cl
278						美濃国可見郡平牧村地方涅槃習俗	高山青嶂	320	clm
279				207	207	図版考説	大野雲外 柴田常恵	370	囲み
280				209	209	甲斐の落葉	山中笑	462	cl
281						瘧について	光井清三郎	466	l
282				210	210	甲斐の落葉(六)	山中笑	487	ckl
283						アイヌの家章	坪井正五郎	499	cml
284			19	211	211	涅槃風習に就て	高山青嶂	33	t
285				212	212	対馬の亀卜	柴田生	68	f
286						日向国児湯郡戸農村地方涅槃習俗	高山青嶂	72	ft
287				213	213	くちよせ	竹内浅助	95	ft
288						日向国西臼杵郡岩戸村地方涅槃習俗	高山青嶂	105	t

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
289	M37	1904		214	214	信濃旅行記	玉置繁雄	148	t
290				215	215	水掛祝の起源	出口米吉	170	f
291				216	216	埼玉群馬両縣下踏査概記	柴田常恵	216	t
292				217	217	北武蔵二日旅行	出口米吉	268	t
293						大隅国熊毛郡北種子村(西之表)地方涅槃習俗	高山青嶂	282	ft
294				218	218	競争の勝負を以て一年の幸運を獲得せんとする厭勝	出口米吉	304	f
295				220	220	対馬国下縣郡巖原町地方涅槃習俗	高山青嶂	397	t
296						同郡上山田村松尾神社鳥居前古墳	杉岡丘園	404	clm
297				221	221	伊豆初島の遺跡及び土俗	玉置繁雄	428	cfmfts
298						琉球雑録 その一	森山徳助	436	fm
299						美濃国加茂郡東白川村(越原区地方並に其附近)涅槃習俗	高山青嶂	444	cft
300						鳥居龍蔵君琉球通信		451	c
301				222	222	森山氏の琉球語のことに就て	鳥居龍蔵	458	c
302						琉球雑録 その二	森山徳助	478	f
303						対馬国上縣郡西津屋村(並にその地方附近)涅槃習俗	高山青嶂	480	mt
304						沖縄上流の結婚		486	clmt
305			20	223	223	東京人類学会満二十年記念講演	坪井正五郎	2	fm
306						沖縄人の皮膚の色に就て	鳥居龍蔵	44	f
307				225	225	甲府より富山に至る途上の見聞	出口米吉	150	clms
308						大隅国熊毛郡中種子村(野間)地方涅槃習俗	高山青嶂	165	f
309						沖縄の雨乞ひ	内田すゑ子 書簡	172	fm
310	M38	1905		226	226	琉球人の誕生日に関する儀式	内田すゑ	195	cl
311						大隅国熊毛郡上尾久村(永田)地方涅槃習俗	高山青嶂	202	cfmts
312						近時学界の現象	鳥居	217	fm
313				227	227	沖縄諸島に住居せし先住民に就て	鳥居龍蔵	235	f
314						例会		261	fm
315				228	228	鬼の来る夜	出口米吉	269	cfm
316						陸中盛岡附近の土俗	草野甚太郎	289	cfis
317				230	230	衣服の起源(東京裁縫女学校に於ける講話)	坪井正五郎	351	cf
318						琉球人の日常生活	内田すゑ	359	cfkl
319						菌固の考	出口米吉	361	c
320						大隅国屋久島永田に於ける魔除け厭勝	高山青嶂 松下齊 報	372	t
321						美濃に於ける「朝日さす云々」の歌	林魁一 書簡	372	t
322				231	231	衣服の起源(承前)	坪井正五郎	378	f
323				233	233	海岸通りから出立までの記事	三好勇	486	cl
324				234	234	左側右側尊卑の習慣	坪井正五郎	495	f
325						撒豆望粥及散米	出口米吉	506	fl
326						左右の尊卑について	金子徴	518	f
327						新著目録		524	c
328			21	235	235	口絵説明	柴田常恵	35	lm
329						野中完一君よりの来信	野中完一 書簡	39	cl
330	M39	1906		238	238	門松考	出口米吉	121	clm

No.	和暦	西暦	巻	号	通号	論考名	著者	頁	目印
331						日本石器時代人民の頭髪(日本主要石器時代遺跡発見土偶の研究第二回)(第二百三十六号続き)	吉田文俊	156	f
332						左右尊卑に関する白鳥教授の説		164	c
333				239	239	日本石器時代人民の頭髪(前号に続く)	吉田文俊	177	f
334				240	240	強迫的禁厭	出口米吉	210	c
335						神生貝塚記事(第二回)	今西龍	220	f
336						日本石器時代人民の頭髪(前号に続く)	吉田文俊	234	f
337				241	241	欽明帝御陵近傍の石造の由来につきて	出口米吉	259	bclm
338				242	242	神生貝塚記事(第四回)	今西龍	300	f
339						蛇崇拝につきて思ひ付ける事ども	出口米吉	317	c
340						口絵説明		328	fl
341				243	243	東北地方踏査概要	柴田常恵	344	f
342				245	245	海南諸島宗教考	田代安定	413	cklm
343						奥羽に於ける石器時代ニ三の遺物	S I	448	f
344						柴田常恵氏の山陽山陰旅中通信	柴田常恵 書簡	451	lm
345				246	246	常陸飯出貝塚発見の所謂有髻土偶と其類品	坪井正五郎	453	fl
346						伊豆大島の婦人(高等女学講義第三学年第三号ヨリ転載)	篠原とら子	478	clm
347						柴田常恵氏の山陰旅中通信	柴田常恵 書簡	486	l
348						伊豆大島通信	篠原とら子 書簡	488	clms
349			22	248	248	樺太アイヌ風俗	中原源治 撮影	口絵	t
350				249	249	園生行の効果	坪井正五郎	121	l
351						美濃国に於けるオコリに関する妄信俗伝(賀茂郡太田町近傍)	林魁一	123	lt
352	M40	1907		250	250	松に対する邦人古来の思想	菅野真澄	159	t
353						樺太貝塚に発見せられたる動物の残り物	石田収蔵	164	l
354						中澤澄男 八木契三郎 両君著「日本考古学」	松村生	170	lm
355				251	251	陸中のチャシコツ?	伊能生	209	t
356						動物学雑誌	広告		t
357				252	252	猿と人との比較	内山正居	245	ct
358						薩南海島の統謡	田倉氏 採集	355	cf
359				253	253	琉球人の仏事に関する儀式	内田すゑ子	295	fl
360						越中国五箇山の方言	米澤生	301	t
361				258	258	烏崇拝の遺習	出口米吉	489	lt
362			23	260	260	支那福州の科蹄(江上生活の賤民)	Y I 生	72	ft
363				261	261	カラフト アイヌの墓所	坪井正五郎	103	f
364	M41	1908		262	262	新羅時代の土器に彫刻せる神話	今西龍	139	t
365						元旦の福神	出口米吉	143	t
366				263	263	カラフト石器時代遺跡発見の鳥骨管	坪井正五郎	157	kl
367						石剣の形式に就て	大野雲外	164	f
368						左義長考	出口米吉	167	flt
369				265	265	飯杓子に対する俗信の由来	出口米吉	244	cfimt
370						台湾と琉球	伊能嘉矩	249	cft
371				266	266	尾張熱田高倉貝塚実査	鍵谷徳三郎	276	l
372						台湾土蕃の口碑(二六四号の続)	伊能生	299	cf

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
373						樺太紀行(中)	石田収蔵	302	l
374				267	267	台湾バイワン蕃族の彫刻模様	伊能嘉矩	318	f
375						陸前名取郡地方に於ける見聞	坪井正五郎	325	t
376						台湾の漢人に行はるゝ端午節	伊能生	330	t
377						台湾に於ける漢族(閩人)の清明節及拾骨	Y I 生	340	m
378				268	268	徒然草に見ゆるクサメの風習	出口米吉	382	cf
379				269	269	台湾ピイボオ蕃の一支族パゼツへ(PAZEHHE)の旧慣一斑	伊能嘉矩	406	clmy
380				270	270	涅槃に就て	南方熊楠	446	ft
381			24	271	271	我国に於ける石崇拜の痕跡	出口米吉	10	ft
382				272	272	沖縄いろは歌並に其解	内田すゑ子	62	f
383						南波照間物語	よ,い	77	cl
384	M42	1909		274	274	小児と魔除	出口米吉	140	cl
385				275	275	尾張国西春日井郡北里村発見の古鏡	坪井	178	ml
386				276	276	沖縄いろは歌正誤及び解釈追加	内田すゑ子 書簡	233	f
387				278	278	出口君の「小児と魔除」を読む	南方熊楠	292	cfms
388				279	279	台湾のブユマ族に行はるゝ祭租の儀式	伊能嘉矩	325	lm
389				280	280	興安嶺附近に於ける薩満教の遺風	鳥居龍蔵	368	f
390						台湾黥面蕃のお伽噺	森丑之助	392	f
391				282	282	台湾各蕃族の頭形論 其一	鳥居龍蔵	452	l
392						我国に於ける植物崇拜の痕跡	出口米吉	456	fl
393						東部蒙古旅行記	鳥居きみ子	467	l
394						子供に関する注意の進歩	坪井正五郎	483	l
395						Rudnev,A.D. Melodii Mongolskif	鳥居龍蔵	487	l
396						アレプレヒトベンクー人類起源の時代		489	l
397						金澤庄三郎一日韓両国語同系論		489	l
398						上総君津郡青堀村発見の弥生式土器(口絵説明)	柴田	491	l
399						人名ヲ呼デ見啼ヲ止ル事	南方	492	l
400			25	283	283	フキリッピン諸島語に於ける F と V	Carlos Everett Conant 記 鳥居龍蔵訳	14	f
401	M43	1910		287	287	台湾バイワン蕃族の宗教思想の一端	伊能嘉矩	168	f
402						アイヌのオホシマ,カムイに就き	いのう	198	f
403				289	289	「キビシヨ」の渡来に就て	山笑生	265	f
404				290	290	古代発火法の遺風	坪井正五郎	302	f
405						新著紹介及批評 石神問答	柴田常恵	315	f
406				291	291	本邦に於ける動物崇拜(追加)	南方熊楠	325	m
407				292	292	新著紹介及批評 遠野物語	柴田	392	f
408				293	293	下総国東葛飾郡馬橋村地方の方言	宮本摺衣	425	mt
409				294	294	漢族の死及び未来に関する民間信仰の概括	伊能嘉矩	450	f
410			26	295	295	出雲雑記(四)	柴田常恵	33	f
411				296	296	人類学講話(一四)華族人類学会にての講話に基づく	坪井正五郎	65	f
412						馬頭神に就て	南方	80	f
413	M44	1911		299	299	山神「オコゼ」魚を好むと云ふ事	南方熊楠	189	f

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
414				300	300	西暦九世紀の支那書に載たる「シンダレラ」物語(異なる民族間に存する類似古話の比較研究)	南方熊楠	215	f
415						台湾の漢人に見らるゝ生子関係の慣習及び迷信(四)	伊能嘉矩	231	f
416						出雲雜記(六)	柴田常恵	246	ft
417			27	1	301	踊の今と昔	柳田国男	3	cklm
418						魔除に赤色を用ゐる由来	出口米吉	14	f
419						希臘の婚礼	前田太郎	32	f
420						山神と「ヲコゼ」	柳田国男	51	f
421				3	303	祓に関する一習慣について	出口米吉	144	f
422				4	304	台湾のアミ蕃族に行はるゝ分級制	伊能嘉矩	197	f
423						祓に関する一習慣について(続)	出口米吉	217	f
424						日本語とアイヌ語との比較	吉田巖	225	ft
425						琉球人種論	柴田	309	ft
426				6	306	「イタカ」及び「サンカ」	柳田国男	338	km
427						日本語とアイヌ語との比較(続)	吉田巖	359	ft
428						山神猫を忌む	前田生	377	ft
429				7	307	台湾漢人の迷信俗伝(二)	伊能生	428	ft
430				8	308	「イタカ」及び「サンカ」(其二)	柳田国男	468	k
431				9	309	水上住居に就いて	笠井新也	521	f
432						琉球八重山俚諺集	岩崎卓爾	545	f
433	M45	1912	28	1	310	松浦武四郎翁の蝦夷土産道中双六に就て	柴田常恵	48	f
434						河童に就て	南方	55	t
435						古代ヨメの意義	前田生	56	clmt
436						二百年來の火種	岩手日報	57	cl
437				2	311	「イタカ」及び「サンカ」(其三)	柳田国男	78	clk
438						降雨の呪術について	出口米吉	99	cmts
439						神狼の話	南方	122	t
440				3	312	聾神	名古屋 YI 生	182	t
441				4	313	狗賓餅と黄泉戸喫	出口米吉	192	f
442						遠野雜記	佐々木繁	210	ft
443				5	314	日本民俗学会の設立		298	f
444				6	315	アイヌのト筮禁厭	吉田巖	320	c
445						御歳木	石巻良夫	333	clt
446						津軽の虫送祭	武田眞一	359	lt
447						遠江見附町の裸祭		366	lt
448						近刊雑誌掲載の人類学関係要目		367	s
449						伯耆米子の婚姻風俗	大阪朝日新聞	368	clms
450				7	316	大和国に行はるゝ、テンゴク(天御供)について	出口米吉	380	cft
451						石鏃と神軍	宮本摺衣	407	clm
452						近世名古屋に於ける民間信仰の二三	前田生	424	cmt
453						明治初頭に行はれ出した名古屋の手鞠唄	前田生	426	t
454						大阪八十島祭の奇風	大阪時事新報	432	clmt
455				8	317	睡眠中に靈魂抜出づとの迷信	南方熊楠	441	l

No.	和暦	西暦	巻	号	通号	論考名	著者	頁	目印
456	T2	1913		9	318	狼人信仰の起源(上)	前田太郎	546	f
457						陸中遠野地方の婚姻	よ,い	555	flts
458				10	319	越後国西頸城郡能生村海底発見の石製品	大野氏	巻頭	f
459						下野赤城の助太刀		583	t
460						アイヌ謎々集	吉田巖	592	f
461				11	320	故坪井理学博士論文目録		648	c
462	T3	1914	29	1	321	思ふこと	鳥居龍蔵	28	ckm
463						陸中国遠野郷にての冬期に於ける年中行事の一例	佐々木繁	34	cklms
464				2	322	忌詞につきて(再び)	出口米吉	76	t
465				3	323	土俗覚帳(ニ)	出口生	112	t
466				4	324	台湾生蕃の山中生活	森丑之助	153	t
467				6	326	美濃国に行はるゝ崇拜	小川栄一	228	t
468						土俗覚帳(三)	出口生	237	t
469						朝鮮旧慣調査(一)	中島生	242	lmt
470				7	327	台湾に於ける各蕃族の埋葬法に就て	森丑之助	253	f
471						土俗覚帳(四)	出口生	280	mt
472				8	328	水の神としての田螺	南方熊楠	331	t
473				11	331	アイヌ謎々集(後編)	吉田巖	437	f
474						太古の壺と漆	仙台日日新聞	458	t
475						新疆発掘壁画に見えたる燈樹の風俗に就いて	原田淑人	463	t
476						土俗覚帳(五)	出口生	485	mt
477	T5	1916	31	1	345	卑南社の祖先(台湾蕃族の伝説)	森	31	t
478				2	346	小谷沼発見の剝舟に就いて	西村眞次	39	ft
479						眼と吭に仏有りと言ふ事	南方熊楠	47	ft
480				3	347	美濃国に行はるゝ、祭礼奇習	小川栄一	94	t
481				5	349	河内国山田村二子塚調査報告	梅原末次	161	ft
482				7	351	アイヌの魚介類説話	吉田巖	248	lm
483				9	353	アイヌの言葉遣	吉田巖	319	ft
484				10	354	さいとう	上野	356	t
485						アイヌ婦女夫の名を語らぬこと	吉田巖	356	t
486	T6	1917	32	1	357	朝鮮の石戦風習	八木樊三郎	1	f
487				2	358	マーヤ伝説(台湾の土蕃の口碑)に就きて	伊能嘉矩	41	ft
488				3	359	石戦風習に就きて思ひ出づるまに、	伊能嘉矩	78	f
489						陸中の傀儡ヶ坂物語	よ,い,	88	t
490				5	361	山の神に就て	南方熊楠	141	clm
491				7	363	ポナベ島土人の文身に就て	長谷部言人	193	f
492				8	364	東北亜細亜に於ける無言貿易に就て	鳥居龍蔵	222	f
493						伊勢神宮の神事に就て	石巻良夫	239	clm
494				10	366	頭上運搬	八木樊三郎	296	f
495						陸中遠野郷の説話数種	佐々木繁	313	t
496						無言貿易(三二巻八号鳥居君論文参照)	南方熊楠	316	fm
497						CHASHI より導かれし地名	よ,い	319	bc
498				11	367	比比羅木之八尋矛に就き	伊能嘉矩	334	cfis

No.	和暦	西暦	巻	号	通号	論考名	著者	頁	目印
499						Articulation の意義	藤岡勝二	350	cl
500				12	368	蝦夷はアイヌなりや	長谷部言人	377	clm
501						結城城址に存在する穴は如何なるものか	大野雲外	387	c
502	T7	1918	33	1	369	陸中に於ける馬に就きての諸伝説及行事	伊能嘉矩	413	clmt
503						親の言葉に背く子の話	南方熊楠	421	ft
504						曾谷村に行はれし奇習	高橋善吉	428	t
505				2	370	肉吹ひと云ふ鬼	南方熊楠	56	t
506				4	372	奥俗溯源	伊能嘉矩	89	cft
507				6	374	記録に見ゆる奥州の山男	伊能	177	ft
508				7	375	越中国水見郡宇波村大鏡の白山社洞窟	柴田常恵	184	t
509				8	376	盛岡の樺火	伊能生	238	ft
510						陸中遠野地方に於ける産神としての山神	いのう	240	clm
511						大口魚物語	伊能	242	fmt
512	T8	1919	34	1	381	風俗の溯源より観たる陸中遠野郷地方の新年慣行	伊能嘉矩	29	t
513				4	384	頭上運搬に就きて	伊能嘉矩	124	ft
514						民俗心理に著はれたる賽神思想の変化を論ず(一号続き)	橋口長一	131	f
515				6	386	民族心理に現はれたる憑節供に就て	橋口長一	191	f
516				7	387	比律賓北呂宋イフガオ族に就て	移川子之藏	232	f
517				8	388	四神と十二獣に就て	南方熊楠	251	f
518				9	389	遠野郷地方の人形祭に就き	伊能嘉矩	315	ft
519	T9	1920	35	6,7	398 399	八重山諸島物語	宮良當壯	166	f
520				9,10	401 402	八重山諸島物語(前号の続)	宮良當壯	238	ft
521				11 12	403 404	八重山諸島物語(前号の続)	宮良當壯	306	ft
522	T10	1921	36	1 2 3	405 406 407	八重山諸島物語(前号の続)	宮良當壯	38	ft
523	T11	1922	37	4	420	奄美大島の土俗と宗教とに就て	昇曙夢	104	ft
524				6	422	台湾の生蕃に見らる、犬の名の例	伊能生	177	f
525	T13	1924	39	1	435	九州宇佐のマツカセ踊り	南善吉談	43	t
526				7 8 9	441 442 443	石棺の封鎖装置	長谷部言人	251	f
527	T14	1925	40	1	447	日本石器時代家犬に就て	長谷部言人	1	f
528				3	449	日本石器時代家犬に就て(追加第二)	長谷部言人	103	f
529				12	458	南洋西部の唐草模様	移川子之藏	433	f
530	T15	1926	41	1	459	伝説と土俗	佐山融吉	33	ft
531				12	470	人種混淆の問題に就て	柳田国男(講演)	600	f
532	S2	1927	42	2	472	長崎地方に遺存せし Jus primae noctis の痕跡	八重津輝勝	52	f
533				4	474	蝸牛考	柳田国男	126	k
534				5	475	蝸牛考(二)	柳田国男	162	k
535				6	476	蝸牛考(三)	柳田国男	223	k
536						台湾旅行談	杉山壽榮男?	240	f

No.	和暦	西暦	卷	号	通号	論考名	著者	頁	目印
537				7	477	蝸牛考(完)	柳田国男	273	k
538				8	478	那覇市外城嶽貝塚発掘報告(予報)	小牧實繁	300	cf
539						石器時代の死産児埋葬	長谷部言人	313	cf
540				9	479	人種混淆研究の進歩	イーエーフツ トン	362	f
541				11	481	語法上から観たアイヌ(一)	金田一京助	411	f

以降チェックなし